

紀伊のサンマ漁業*

阪本俊雄・竹内淳一・吉村晃一・武田保幸（和歌山水試）

和歌山県熊野灘は伊豆、房州と共に我が国サンマ漁業発祥の地と言われ、戦前においては和歌山県は全国サンマ主産県の一つとして名を連ね、全国一の生産を揚げたことは再三であった。また、我が国海難史上に残る大惨事となった1892年の勝浦サンマ漁船の遭難[＊]、佐藤春夫のサンマの歌等紀伊和歌山県のサンマとの係わりは強かった。しかし、戦後は火光利用、棒受網普及による東北沖合の飛躍的生産増により和歌山県のサンマ漁業は全国と同業隊列から完全にはずれてしまい、現在ではわずかに数隻の小型漁船で昔ながらの沿岸域において漁業が行われているにすぎない状態となっている。このようにサンマは現在の和歌山県漁業においてはさしたる重要な位置を占めているわけでもなく、また、著者らは特別にこれに焦点をあてた調査研究を行ってもいないが、ここでは上述のような歴史的因縁により、最近の漁海況モニタリング調査ならびに漁業聴取り調査等から得られた現在の和歌山県のサンマ漁業と生物の情報を整理して報告する。

1. 漁船・漁法

現在流刺網、棒受網併用の6～7t級小型サンマ船が勝浦漁協に7隻稼動し、これが現在の和歌山県サンマ漁獲量をささえている主漁業である。他に3～5t級のソーダガツオ、サバ類等対象の沿岸棒受網漁船20～30隻がサンマ魚群接岸時にこれを対象に操業することもある。1965年頃（S. 40）までは17～18t型船が7,8隻稼動していたが、採算がとれず現在の小型化となった。

2. 漁場

上記サンマ漁船の操業範囲は図1に示す通りで、三木崎、檜野崎各SE約15湊、梶取崎SE約30湊で囲まれた海域である。12月までは沿岸2,3湊～約15湊沖合で、2～3月は沖合化して約30湊に及ぶ。

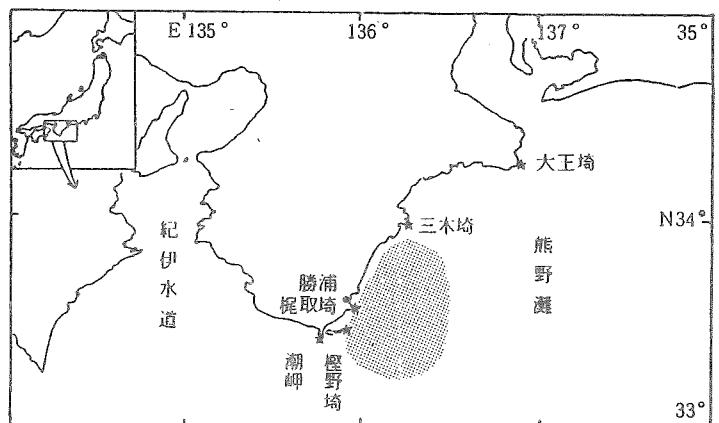


図1 和歌山県勝浦サンマ漁船の漁場

* 第37回サンマ研究討論会報告（昭和62年度）

*2 明治25年12月28日、出漁漁船19組60余隻、出漁人員749人、北西突風による遭難。当日自力帰港者5組168人。当日漁場付近で救助された者123人。30～31日の漂着者、八丈島179人、青ヶ島31人、御蔵島19人、計229人。行方不明者229人、内死体不明者48人（那智勝浦町史、1976）。

3. 漁 期

勝浦漁協の漁獲統計記録（1940年以前は尾数記帳）から各月平均漁獲量を求めると図2の通りである。主漁期は12～2月で、4月頃まで漁獲がみられる。4～5月頃はカツオ漁等への操業転換が行われる。また、10月に突発的に魚群来遊のみられる年（1987年）もあるがまれである。

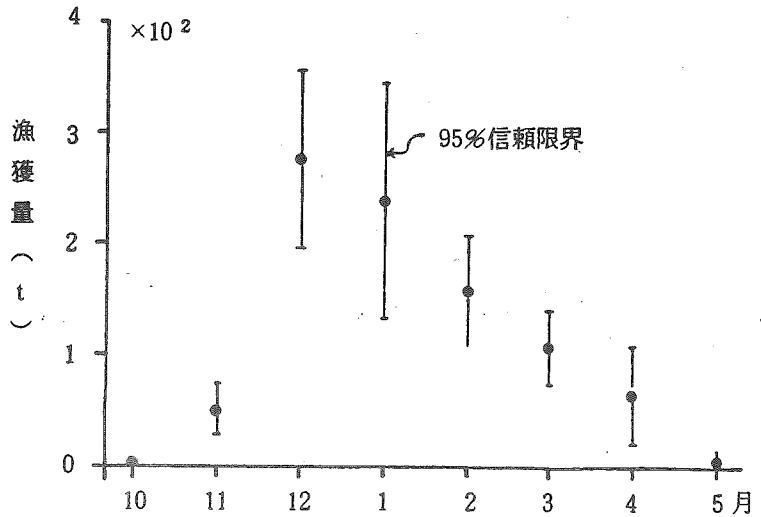


図2 勝浦漁協サンマ月平均漁獲量
1941 (S. 16) 1～1987 (S. 62) 5

4. 漁獲量の変動

図3に小坂・丹野（1984）の整理した1912（T. 元年）～1981（S. 56）の熊野灘を漁場とする和歌山県・三重県の経年漁獲量に1986年（S. 61）までのものを追補して示した。和歌山県の漁獲量は1925年（T. 14）の26,818 t を最高に1960年代前半まではますますであったが、それ以降は上記漁船の減少で漁獲量の水準は低下した。1976～1985年の平均ではわずかに415 t で、これは全国のわずかに0.2%にすぎない。一方、三重県では漁船の大型化によるものか近年では増加の傾向にあり、年によっては約10,000 t の漁獲もみられる。

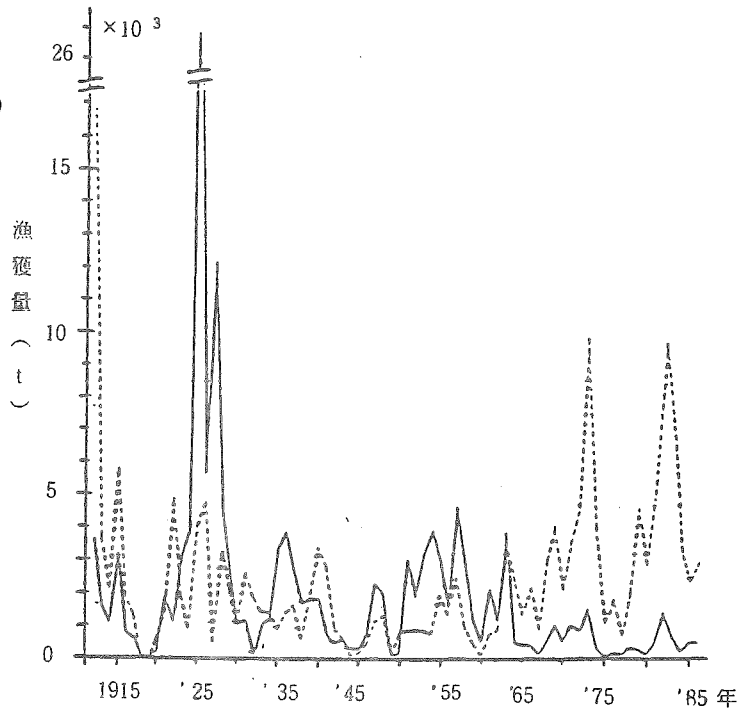


図3 和歌山県、三重県のサンマ漁獲量経年変化
実線、和歌山 破線、三重
(小坂・丹野、1984に追補)

前述のように戦前の和歌山県のサンマ生産は、全国の上位5指に数えられるほどで、1925（T. 14）年の約27,000 t、1927（S. 2）年の

12,000 t はいずれも全国のトップでそれぞれ全国生産の約40%、約30%を占めていた。大正後期において、香川県を始めとする岡山、兵庫の瀬戸内船団、また三重、静岡船団が続々と熊野灘に

進出、紀州勝浦を根拠地としてサンマ漁業が行われた。戦前の和歌山県の上記のような高い位置は、県内においては紀中、紀南の各漁村からの勝浦サンマ漁への集中もさることながら、このような県外船にささえられたところが大きかった。だいたい当時の勝浦魚市場の取り扱い高は地元船3割、外来船7割であったといわれている(中井、1981)。次に、1941(S.16)~1986(S.61)年度の勝浦漁協サンマ漁獲量と1967(S.42)年度以降の水揚げ隻数及び1隻1夜当り漁獲量(cpu)を図4に示した。小坂、丹野(1984)によればこのcpuには5~6年周期の短期変動

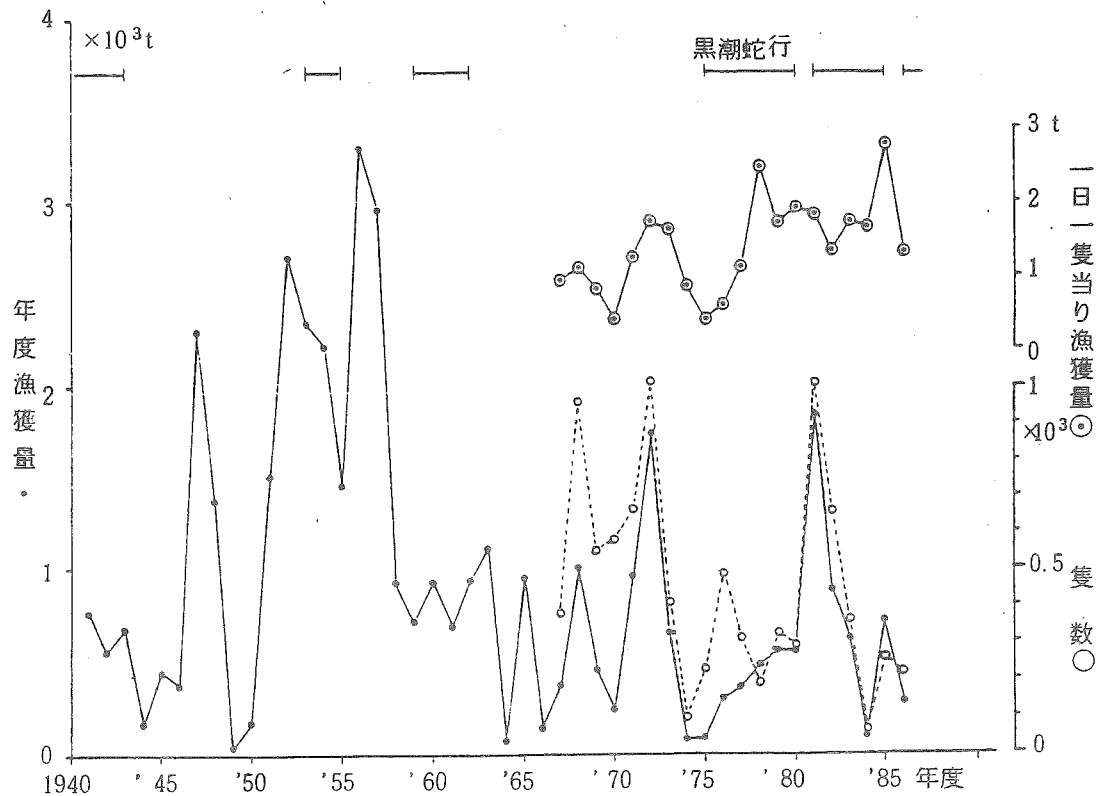


図4 勝浦漁協サンマ経年漁獲量等(7~6月)

がみられ、これに影響する大きな要因は黒潮の蛇行と東北海区における中型魚(24.0~28.9 cm)の相対密度である。後述のように漁況には黒潮が大きく影響し、また当海域の漁獲物はほぼ25~30 cmの体長群であるために、これは十分に納得のいくものである。上記小坂らのcpuは年単位、図4では年度単位(7~6月)であって、図4においては、上記の周期性はみられないこともないが、明瞭でない。1977(S.52)年以前は約1 tであったが、1978(S.53)年以降は約2 tとなって、最近では漁獲性能の高まっていることが窺える。

5. 黒潮と漁況

図4に示される年度漁獲量と黒潮との関係は見出し難いが、月単位においては図5のとおりである。黒潮流路がN型で中心部が潮岬南20 哩内への接岸時には不漁のときも多いが、600 t 以

上の好漁はこのときにみられる。20～50湊のときは約400tが上限で、50湊以遠に離岸時のそれは約200tで不漁である。「サンマは潮に向って弱い」といわれるように、熊野灘で南西方向への流れが急に強くなる時、あるいは沖合から沿岸域への暖水圧迫があるときなどに漁は好転する(1987年10月12月)。黒潮N型の接岸海況時における好漁は潮岬での魚群塞き止めに加うるに上記の条件が働いているのかも知れない

6. 魚体、成熟

図6に1985、'86、'87年度の魚体組成を示した。FL 25～34cmで、1985、'87年度は25～30cmの中型魚、1986年度は、12月のものは三重二木島棒受網、4、5月のものは紀伊水道まき網入網魚であって、これらのためか30cm前後で比較的大きかった。1987年12-2月標本の生殖腺観察から熊野灘来遊魚群はいずれも産卵中のものと判断さ

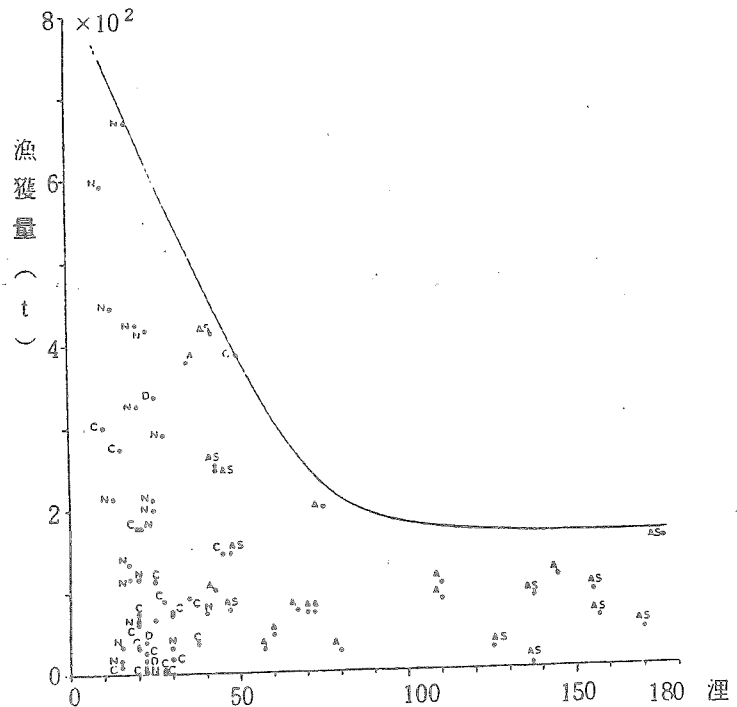


図5 黒潮中心部の潮岬沖合離岸距離と勝浦サンマ漁獲量(月)の関係
1965(S. 40)、1~1987(S. 62)、2, 12、1, 2月 図中の記号は黒潮流型

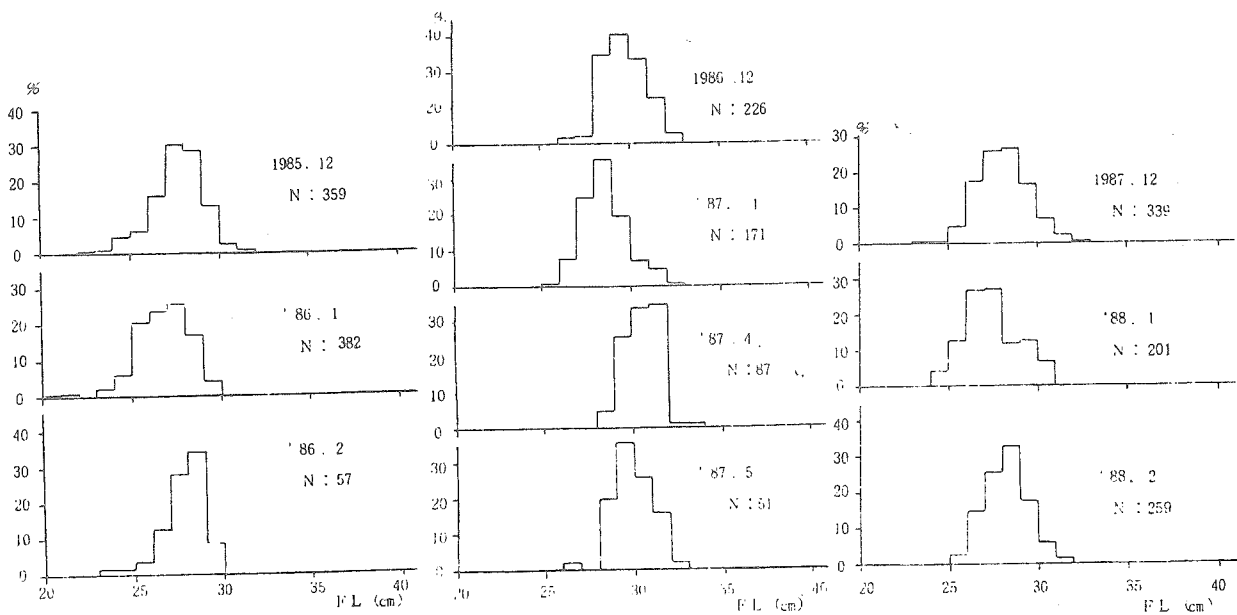


図6 サンマの体長組成

れる。4,5月頃約10cmの若魚が沿岸の棒受網、まき網等で混獲されることがある。

7. 稚仔分布

沿岸定線調査時における㊦A網採集のサンマ稚仔数を図7に示した。稚仔は和歌山県沿岸全域にみられるが、熊野灘、紀州灘の外海域に普通分布し、紀伊水道では少ない。稚仔出現の経年変化は図8のとおりで、黒潮の接岸年には少なく、離岸年に多い傾向がみられる。稚仔は黒潮のウームコア上に多く分布するが（武藤・小坂・林、1983）、上述の現象は、黒潮離岸時には熊野灘冷水塊外縁の反時計廻り黒潮逆流によって紀州沿岸には接岸時よりもより多く流されていることを示している。

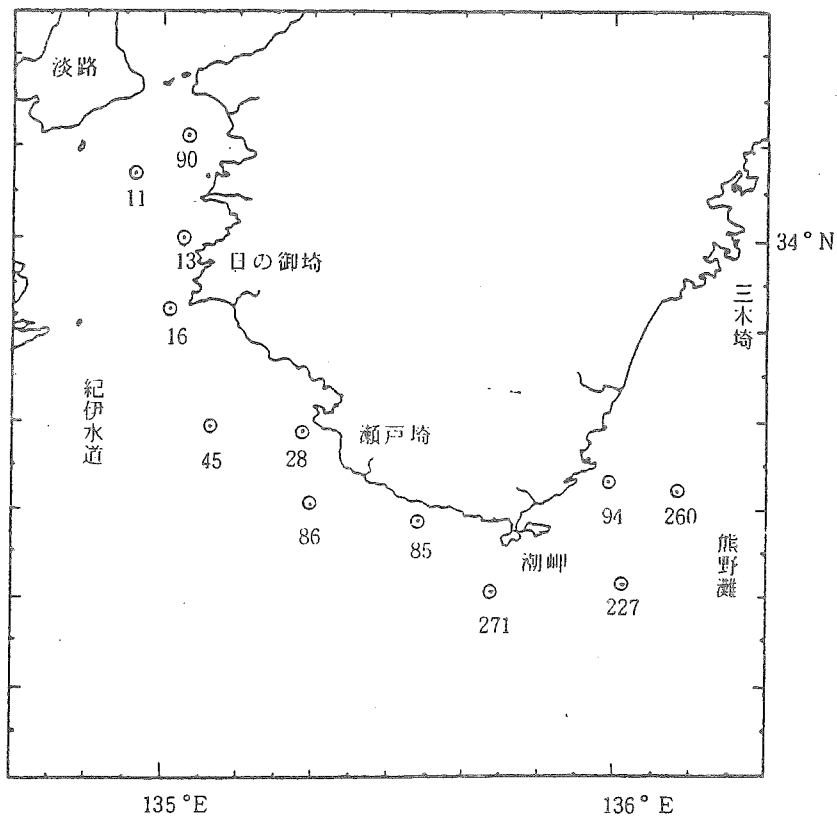


図7 和歌山水試沿岸定線㊦A網サンマ稚仔採集の状況
1966. 1～1987. 12合計尾数（除、7～10月）

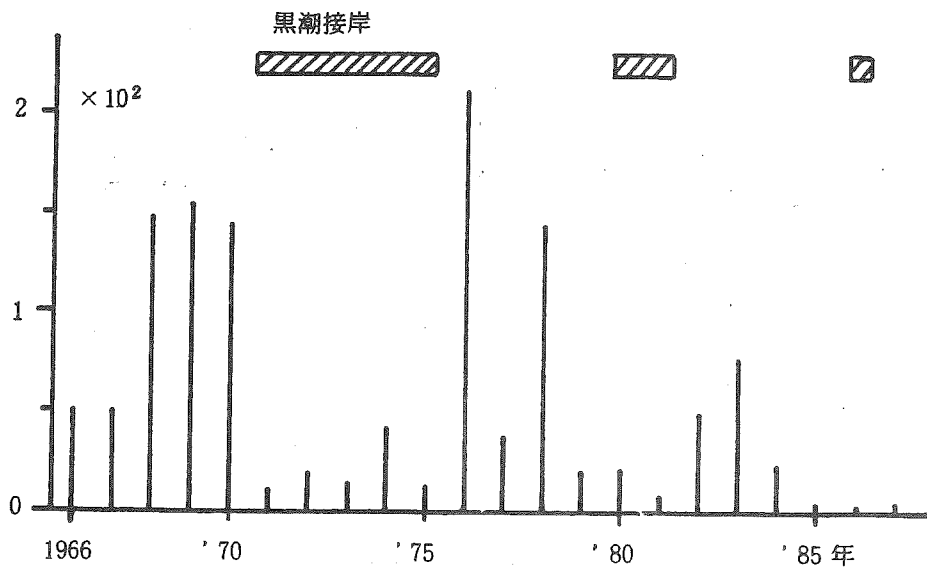


図8 和歌山水試沿岸定線A網サンマ稚仔採集尾数の変化（前年の11月～その年の6月）

参 考 文 献

- 福島信一（1978）北西太平洋系サンマの回遊機構の総観的解析。東北水研報，41，1 - 70.
- 小坂 淳・丹野信一（1984）熊野灘におけるサンマ漁獲量の変動についての一、二の知見。東北水研報，46，21 - 26.
- 武藤清一郎・小坂 淳・林 小八（1983）黒潮の蛇行とサンマ稚仔の分布・移動について。昭和57年度漁業資源研究会議、環境部会部会報、70 - 91.
- 中井 昭（1981）戦前におけるサンマ漁業の発達。サンマ漁業の歩み（全国サンマ棒受網漁業生産調整組合）、65 - 182.
- 那智勝浦町（1976）漁民遭難、那智勝浦町史、史料編一、323 - 364.
- 宇田道隆（1984）海と漁の伝承。玉川大学出版部（東京）、392 P P .
- 和歌山県水産試験場（1984 - 1988）和歌山県漁海況情報。1 - 50.